

金曜夜の銭湯が発展場になっていると知らずに常連たちに何度も絶頂させられる

(気持ちよかった……)

金曜の夜。一週間分の疲れを引きずって、いおりは暖簾をくぐった。

繁華街の外れにある古い銭湯だ。最寄り駅から少し歩いた路地の奥、看板の灯りだけが薄く滲んでいる。職場の同僚に「穴場だよ」と教えてもらって初めて来たのが三週間前。それからすっかり気に入って、疲れた仕事終わりには決まってここへ足を向けるようになっていた。

番台でタオルを受け取り、脱衣所で服を脱ぐ。広い浴場に湯気が満ちていて、体の芯からほぐれる感じがいおりは好きだった。

ひと通り体を洗って、湯船に浸かる。平日の夜にしては客の数が多かった。金曜日だからだろうか。

(金曜に来るのは初めてだけど、いつもより人がい

るな……)

目を細めてぼんやりしていると、なんとなく視線を感じた。

気のせいかと思ったが、顔を上げると湯船の向こう側、洗い場のあちこちから、確かにこちらを見ている男たちがいる。

年齢層はばらばらだ。二十代らしき若い男もいれば、四十代とおぼしき体格のいい男もいる。視線の質が妙だった。品定めするような、品定めというよりは、もっと直接的ななにかを含んだ目。

いおりは少し居心地が悪くなって、湯船を上がった。

(上がってから休憩エリアで涼もう……)

体を拭いて脱衣所を抜け、奥の休憩エリアへ向かう。低いリクライニングシートがいくつか並んでいて、照明は落とされている。タオルを腰に巻いた男たちがぼつぼつとシートに体を預けていた。

いおりが空いているシートに腰を下ろすと、また視線が集まった。

浴場だけじゃない。ここでも見られている。

(なんで……?)

周りをそっと確認すると、薄暗がりの中でこちらを窺う目がいくつもある。全員男性、それは確かだ。なぜか固まって凝視するように見てくる男性たちまでいる。

いおりは少しひるんだが、視線を逸らして正面を向いた。

(気にしすぎかな……)

そう思ったが、一人の男性がこちらへ近づいてきた。

二十代後半か三十代前半、端正な顔立ちに切れ長の目をした男だった。

薄い灯りの中でもわかるほど整った容姿なのに、

その目に宿る光は最初から値踏みするように静かで冷たかった。

声音は低く、耳に直接流し込まれるような質だった。

「一人か？」

ひそひそ声でもなく、さりとして周りに聞こえるほどでもない。ただいおりだけに届くよう、男は顔を傾けた。

「目的があってここに来た？ 金曜夜のこのエリアが何かは、もう知ってるだろ？」

「ええと……？」

他の男たちが聞き耳を立てているのが雰囲気からわかる。

（常連がいるのはわかるけど、なんかルールとかあるのかな……？）

いおりがどう答えていいのか分からずあたふたしている、男は答えを待たずいおりの隣に腰を下ろした。まるで獲物の逃げ道を塞ぐように。

「好奇心で来たなら、俺が相手してやる。ちゃんと気持ちよくしてやるから」

言葉の意味を考える間もなく、男の手がいおりの背中へ回った。

「あっ、ちょっ」

「声、聞かせる派か？ まあ、吐息でも聞こえるか」

「っん……！」

そう言って男はいおりの耳元に唇を寄せて、ゆっくりといおりの胸板に手を滑らせてきた。

タオル越しでも伝わる体温。大きな手が左の胸のあたりをすりすりと確かめるように撫で、それから乳首を探るような動きに変わっていった。

男の迷いのない手つきにいおりは返事もできず体